

アミーゴ会だより

2014年10月
通巻第20号
季刊2014-IV

www.mex-jpn-amigo.org



発行人：上原尚剛
編集人：河嶋正之
鴻巣勝明
事務局：笠井道彦

メキシコ歴史文化講演会2014：第3回報告

チマルパインの『日記』と支倉使節団

専修大学准教授 井上幸孝

メキシコ歴史文化講演会の第3回講演会（7月4日）では、メキシコの先住民ドミンゴ・チマルパインが書き残した『日記 (Diario)』を紹介し、そこに記された慶長遣欧使節団のメキシコでの様子を考察しました。さらには、この記録者や彼が生きた当時のメキシコ市からアジアがどのように見えていたかについて考えてみました。



メキシコと日本の接触

16世紀末から17世紀初頭にかけてメキシコと日本は幾度かの接触の機会がありました。例えば、1597年、長崎の西坂において豊臣秀吉の命で殉教した26聖人には、メキシコ出身者（聖フェリペ・デ・ヘスス）が含まれていました。この人物の殉教場面はヌエバ・エスパーニャ（植民地時代メキシコ）の各地で表象されるようになります。



(モロス州クエルナバカ大聖堂)



(メキシコ州シナカンテペク修道院)

1609年には臨時フィリピン総督を務めたロドリゴ・デ・ビベロ（当時のヌエバ・エスパーニャ副王の甥）が上総国（千葉県御宿）に漂着します。翌年にビベロはメキシコへ帰還することとなりましたが、1611年には今度はメキシコの側から使節としてセバステイアン・ビスカイノが日本に派遣されています。

そして1613年、伊達政宗は支倉常長を中心とする使節団をヌエバ・エスパーニャ経由のヨーロッパへの旅へと送り出します。太平洋を越えて同年末にアメリカ大陸沿岸にたどり着いた一行は、翌1614年初頭にアカプルコへ上陸し、陸路メキシコ市を目指しました。数か月間のメキシコ市滞在後、一行はプエブラを通過して東側の港ベラクルスまで移動してから出航し、キューバに寄港した後、スペイン、ローマを目指すこととなりました。

チマルパイン登場の背景

さて、スペインによって植民地化される以前のメキシコおよび中米には、メソアメリカ文明と総称される高度なアメリカ大陸先住民諸文化が栄えていました。3000年以上にもわたって文明の興亡が見られたこの地域で、スペイン人が最初に出会い、征服したのは、いわゆるアステカ王国でした。

メソアメリカの人々の間には文字と文書を用いて暦や歴史などの記録を残す習慣がありました。アステカの時代には、神聖暦の記録（トナルアマトル）、年毎の歴史的出来事の記録（シウアマトル）、貢納記録、土地領域の記録などがあつたと考えられます。

後述のように、17世紀前半にチマルパインは数々の歴史文書を書き残しますが、それらは主に年毎の事件を書き記していく年代記形式です。つまり、植民地時代になってスペインの支配下に置かれ、外来文字であるアルファベットが導入された後も、シウアマトルの伝統は形を変えて受け継がれたわけです。

ドミンゴ・チマルパイン

チマルパインは1579年にメキシコ盆地南東部のチャルコ地方で生まれました。彼の先祖は同地方アマケメカン（現メキシコ州アメカメカ）の貴族です。彼自身が書き残しているフルネームは非常に長く、ドミンゴ・フランシスコ・デ・サン・アントン・ムニオン・チマルパイン・クアウトレワニツィン（Domingo Francisco de San Antón

目次

- | | | |
|--|--------------|-------|
| 1. 第3回講演会報告：「チマルパインの『日記』と支倉使節団」 | 井上幸孝 | ... 1 |
| 2. 第4回講演会報告：「メキシコ美術に見る日本～聖フェリーペ・デ・ヘスス～」 | 川田玲子 | ... 3 |
| 3. 私とメキシコ：「保育園での LunchiTrip メキシコ便の報告」(異文化理解イベント) | 長谷川恭子 | ...5 |
| 4. 活動報告：「安倍総理とファーストレディー外交」(総理メキシコ訪問裏方記) | 遠藤滋哉 | ...7 |
| 5. メキシコへの誘い：「レフォルマに並ぶ歴史 その5」 | メキシコ観光(メキシコ) | ...9 |
| 6. お知らせ：竹田鎮三郎在メキシコ50年記念展/古川久俊著『Viva!メキシカン・ボクシング』 | トピックス/あとがき | ...10 |

Muñón Chimalpain Cuauhtlehuānītzin) といいますが、最後の2つの姓(「チマルパイン」と「クアウトレワニツィン」)は、かつてのチャルコ地方の王や貴族の人物名に由来します。

15歳の頃、チマルパインは、副王領の中心都市であるメキシコ市へ移り住みました。当時のメキシコ市は、現在のメキシコ市(メキシコ連邦区)とは違い、その空間的広がりのごく限られたものでした。大雑把に言うと、現在の巨大都市メキシコ市の中心部のみがそれに該当します。チマルパインが人生のかなりの期間を過ごしたのは、当時の市の南端に位置するサン・アントニオ・アバド教会でした。諸説があるものの、おそらくはここで助修士としての職務を果たしていたものと思われる。

1606年以降、彼は複数の歴史記録を著すことになります。『第1報告書』～『第8報告書』、『クルワカン市創設についての簡潔な覚書』、『日記』と呼ばれる合計10編が知られていますが、これらのほとんどは上述の通りの年代記形式で書かれています。つまり、『日記』は、日々の活動を書き記していたような文字通りの「日記」ではなく、チマルパインが残した年代記のうち「同時代を扱った年代記」です。ただし、これら同時代の出来事の記録には、年号のみならず、しばしば日付も記されています。

チマルパインは、母語であるナワトル語で、『日記』をはじめとするこれらの文書を書きました。原文は、アルファベットを用いたナワトル語で表記されています。ナワトル語はアステカの時代から先住民の間で広く使われており、植民地時代に入ってから先住民諸集団間の共通言語として機能し続けていました。

『日記』の記述

1614年1月にアカプルコに到着した日本使節一行のうち、最初の一団が3月4日にメキシコ市に入城した様子をチマルパインは次のように書き記しています。

「今日、1614年3月4日火曜日、日本の貴族たちが再びメキシコ市にやって来た。彼らは馬に乗って昼の12時に入城した。彼らの前には徒歩の臣下たちが歩いていて、これらの者たちは、彼らの槍なのかあるいは何を意味するのか、おそらくは日本の領主の象徴なものかもしれないが、細長く黒い棒を高く掲げていた…。」

これ以降、『日記』では支倉使節団に関わる描写が続きます。チマルパインの記述に沿って情報をまとめると、次の通りです。

- ・最初に入城したのは20名だけで、支倉自身を含め後からやって来る者がまだ100名ほどいた。
- ・セバ스티アン・ビスカイーノは遅れて3月17日にメキシコ市入りした。その理由はアカプルコで日本人が彼を殺傷しようとした(ナワトル語直訳は「刺した」)ため。
- ・使節団は、ローマ教皇、スペイン王、ヌエバ・エスパーニャ副王それぞれへの贈り物を持参していた。
- ・「大使」である支倉常長は3月24日にメキシコ市入りし、サン・フランシスコ教会のある場所に位置する1軒の家に宿泊した。
- ・支倉は、メキシコ市には何日か留まって副王に会う

だけで、急いでスペイン王フェリペ3世に会いに行き、さらにはローマ教皇に謁見しようとしていると語った。

- ・4月9日、サン・フランシスコ教会で20名の日本人が洗礼を受けた。支倉自身は洗礼を受けず、スペインでの受洗を望んだ。

- ・4月20日、同教会でさらに22名の日本人が洗礼を受けた。洗礼を授けたのは大司教フアン・ペレス・デ・ラ・セルナだった。

- ・4月25日午後、大聖堂にて大司教セルナが日本人63名に堅信の秘跡を授けた。

- ・5月29日、支倉はスペインへ向けてメキシコ市を出発した。

- ・出発に際し、支倉は臣下を2組(それぞれ同数)に分け、一方をスペインへの旅に随行させ、もう一方にはメキシコでの商業活動を命じた。

- ・出発時、ヌエバ・エスパーニャ副王の命令で、支倉に「秘書」がつけられた。その人物は「ドクトル・マルティネス」のきょうだいで、かつて日本に行ったことがあって日本語のできる者だった。

チマルパインから見たアジア

21世紀の高度に情報化された社会に生きる私たちは、400年前のメキシコの人々が何の情報もなくアジアを思い描くことすら難しかったと想像するかもしれません。けれども、チマルパインの記録を読むと、その他にも日本やフィリピンなどアジアに関する記述が見られ、メキシコ市へ定期的に情報が届いていたことが垣間見られます。

彼をはじめ、当時のメキシコ市の人々にとって、「チナ」(China, 東アジア・東南アジア全般を指す用語としてチマルパインはこの単語を使っています)は、見知らぬ国ではあるけれども、一定間隔で現地からの知らせが届く場所だったようです。しかも、「日本人」と



(植民地時代メキシコの絵画に描かれた日本人)

言えば、実際にメキシコ市で見たことがあり、その姿を容易に想像できる人たちだったように思われます。

メキシコ各地で描かれた長崎の殉教場面や、ガレオン船

で運ばれてきた「チナ」の産品とともに、日本や日本人は私たちの想像以上に身近な世界の一部と認識されていたのではないのでしょうか。

最後になりましたが、このような貴重な機会を与えてくださったアミーゴ会と大使館の関係各位に心より感謝申し上げます。

<了>

【図版の出所:「長崎殉教図」の写真2葉は筆者撮影。「植民地時代メキシコの絵画に描かれた日本人」はRodrigo Rivero Lake, *El arte Namban en el México virreinal*, México, 2005, p. 294より転載】

【編集部注:井上講師の論究「先住民にとっての自然環境の歴史的记忆—スペイン征服を生き延びたナワ人の文書から—」が所載された『文明の盛衰と環境変動 マヤ・アステカ・ナスカ・琉球の新しい歴史像』が岩波書店から2014年9月に刊行されました。また、ミネルヴァ書房から近刊予定の『MINERVA 世界史叢書 総論:「世界史」の世界史』では、「メソアメリカの世界像—征服前からスペイン統治下の変容まで—」の章を執筆されています。】

メキシコ美術にみる日本：聖フェリーペ・デ・ヘススの図像より

愛知県立大学外国語学部非常勤講師 川田玲子

本稿は2014年度「メキシコ歴史文化講演会シリーズ」の最終回「メキシコ美術にみる日本～支倉常長使節団と聖フェリーペ・デ・ヘスス～」の一部で、聖フェリーペ・デ・ヘスス^(注)の図像を中心にまとめたものである。

(注：本稿では以後聖フェリーペあるいはフェリーペとする)

フェリーペの誕生から殉教・列福・列聖まで

フェリーペは長崎の26聖人のひとりである。彼はメキシコ市生まれで、亡くなった時25歳くらいであったといわれるが、誕生の日時や場所、また幼少時代に関しては明らかではない。

青年に達し、プエブラ市のフランシスコ会系修道院(現在聖アントニオ・デ・パドゥア教会堂と、サグラダ・コラソン・デ・ヘスス尼僧院が管理する孤児院がある)に入会したが長続きしなかった。還俗後暫くはメキシコ市の親元で過ごし、1591年にフィリピンのマニラへ渡った。二年後同地で再びフランシスコ会系修道院に入会し、この度は真剣に日課を勤め叙階を受けるまでになった。しかし当時マニラには叙階式を執り行う司祭がいなかった。そこで生国メキシコで叙階を受けることになり、1596年7月にガレオン船聖フェリーペ号でアカプルコに向かった。途中嵐に遭い土佐の浦戸へ漂着した。

上陸後京に向かったフェリーペは、豊臣秀吉が命じたキリシタン捕縛事件に巻き込まれ、1597年2月5日に磔の刑に処せられ殉教した。事件から30年を経た1627年に列福、その後1862年に列聖された。

『チマルパインの日記』と『旧メキシコ市参事会議事録』の記述

メキシコ市に殉教事件の知らせが届いたのは1597年の暮れのことであった。先住民文筆家チマルパインがその時の様子を簡単ではあるが記録している。一年後には殉教者の遺骨が到着しており、その際の歓迎の様子についても伝えている。ところがチマルパインはフェリーペに関しては一切触れていない。

一方、旧メキシコ市参事会議事録によれば、1628年8月31日の議会で、フランシスコ会士が「列福されたこの町出身の殉教者フェリーペのための祝いを行いたい」旨を申し出ており、市参事会はそのための経費を捻出している。翌年の2月5日には一層盛大な祝典があげられ、さらにこの祝祭は年祭とされた。

その後1638年にスペイン国王令によりメキシコ大聖堂に聖フェリーペ礼拝堂が設置された。これはその後の聖フェリーペ崇拜の普及に多いに影響したと思われる。

聖フェリーペの図像

さて、ここからが図像である。

クエルナバカ大聖堂壁画

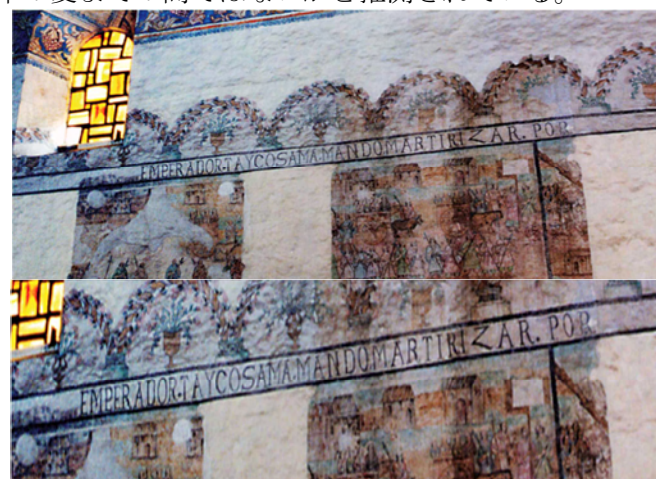
1957年に行われたクエルナバカ大聖堂壁面修復工

事の際に漆喰の下から壮大な壁画が発見され、その一部が復元された。「太閤様が殉教を命じた」という言葉や、捕縛から殉教までの状況が部分的に浮かび上がった。



現在のところ復元された部分に聖フェリーペの姿を確認することは難しい。

この壁画の制作年は明らかではなく、殉教の知らせが届いた1597年暮れから列福の知らせが届いた1628年の夏までの間ではないかと推測されている。



(推定 1597年暮～1628年夏)

17世紀の版画

次に版画を見ていこう。1632年の哲学論文の表紙に添えられた版画に磔姿のフェリーペと日本人処刑人一人が描かれている。筆者が知る限り、これが現存の最古の聖フェリーペの絵姿である。

(1632年)



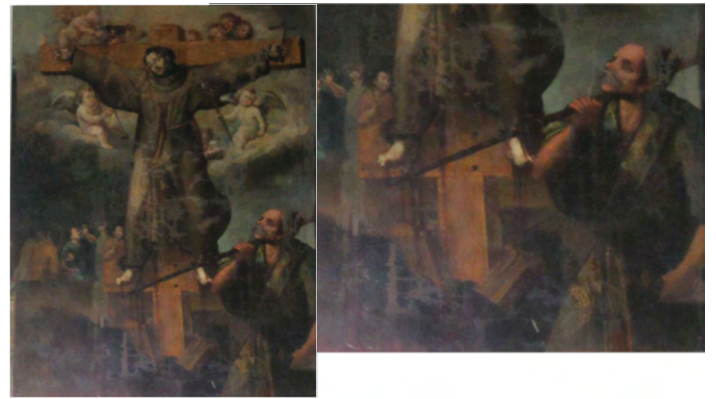
この他 17 世紀の説教集に添えられた版画で、フェリーペと共に日本人処刑人二人が描かれた作品が二点ある。



(1640 年)



(1652 年)



(推定 18 世紀)

三点目はケレタロー市郷土史博物館附属図書館資料室（旧フランシスコ会修道院）に保存されている。上述の二点とは構図が少し異なり、処刑人は一人で、その他に見物人が数人描かれている。

17 世紀から 18 世紀の聖画

最後に聖画であるが、版画と同様に三点紹介したい。

一点は、先に触れたプエブラ市の聖アントニオ・デ・パドゥア教会堂の礼拝堂主祭壇に 2010 年まで祀られていた作品である。磔姿のフェリーペと処刑人が二人描かれている。処刑人の顔や服装は中国風と言ってよいだろう。現在は祭壇にはなく倉庫に保管されている。



(推定 17 世紀後半)

二点目は、サカテカス市グアダルルーペ村の旧グアダルルーペ修道院博物館（1704 年にフランシスコ会修道院として建立された）に展示されている。構図は一点目と同じであるが、こちらは二人の処刑人の髪型や着物を日本風に描こうとした画家の意図が伺われる。向かって右側の処刑人が何とも言い難い不思議な顔でこちらを見ているのが印象的である。



(推定 18 世紀)

聖フェリーペの図像にみる日本のイメージ

これらの作品を前にし、メキシコの人々はどのような思いで日本人処刑人を眺めていたのであろうか。

毎年 2 月 5 日に聖フェリーペに捧げられた説教は、人々に図像の解釈を示す良き手段であったと言えよう。

ここでは 17 世紀から 18 世紀の説教集を参考に、聖フェリーペの図像に描かれた日本のイメージを探ってみよう。

説教集には聖人としてのフェリーペをより聖なる者とするための言葉が綴られ、フェリーペはキリストのイメージに重ねられた。さらに 1597 年の殉教は神が太閤秀吉を通じて行わせたものであり、殉教の地、長崎はまさにゴルゴタの丘であった。こうして「日本及び日本人」はフェリーペが殉教するためになくはならないものとされていったと考えられる。それはカトリック的な解釈をされた日本のイメージである。

殉教 300 周年にあたる 1897 年に『国民の懺悔のための聖フェリーペ教会堂』が建立された。これはメキシコ人が独立後メキシコ市内に最初に建てた教会堂である。その完成式の説教の一部を紹介し、本稿を終えることにする。

「日本程メキシコで名を知られた極東の地はない。我々が祖国で生まれた唯一の聖人は、かの遙か遠くの島々へ殉教を捜しに赴いた。そしてローマは我々に英雄を授けたのだ。熱狂するに値する名誉である」

<了>

【図版の出所：サカテカスの聖画は Elena Isabel Estrada de Gerlero, "Los Protomártires del Japon en la Hagiografía novohispana" en *Los Pinceles de la Historia de la Patria criolla a la Nación mexicana 1750-1860* から転載。その他は筆者撮影。】

【編集部注：川田講師は現在、近刊予定の単著『長崎 26 聖人のひとり、メキシコの聖フェリーペ・デ・ヘスス：四世紀を越えてなお変容する崇拜の歴史』（仮題）を準備中とのこと。出版詳細判明次第、改めてアミーゴ会員の皆様にお知らせします。】

保育園での LunchTrip メキシコ便への ご協力ありがとうございました

LunchTripCrew
NPO ケンパ・ラーニング・コミュニティ協会
保育士 長谷川恭子

初めまして、LunchTrip という食を通じた異文化理解のイベントの運営を行いつつ、ケンパ・ラーニング・コミュニティ協会という NPO で保育士をしておりました長谷川恭子と申します。

LunchTrip とは、2008 年に私を含めた女性 3 人で始めたもので、その国の料理を食べつつ、出身/旅行者をガイドとして特定の国の理解を深めるイベントです。開催時間を飛行機に見立て、運営者をクルー、参加者をパッセンジャーと呼ぶユニークさから Facebook 等のインターネットを通して口コミで広がり、現在、大阪や福岡、静岡でも開催されたり、ガイドと呼ばれるゲストには、ジャーナリスト池上彰氏、内閣総理大臣夫人安倍昭恵氏、国連広報センター長や各国大使にもご“搭乗”頂いております。

普段は保育士として働きつつこの活動を行って来たのですが、ずっと子ども達に向けた LunchTrip の開催をしたいと思っておりました。そしてついに今年度より、私の所属していた保育園を運営する NPO ケンパ・ラーニング・コミュニティ協会と LunchTrip と協同で、

- ・子ども達が楽しく異なる文化に触れる機会を作り、さまざまな違いを認め尊敬する心を育んでいく
 - ・その先に民族・国籍・宗教・文化・発達・しょうがい さまざまな違いを認め学び合う社会の構築を目指す
- を目的に、LunchTrip for children が始動致しました。



メキシコへ“離陸”

去る 2014 年 6 月 30 日(月)にケンパの保育園にてメキシコについて学び、メキシコ風の給食を食べる企画「LunchTrip for children メキシコ便」を開催するにあたり、メキシコについて子ども達にお話しして下さるガイドを探していた私は、アミーゴ会様にご協力のお願いを致しました。すると、すぐに快くご連絡を下さり、アミーゴ会会長の上原様よりメキシコ人留学生のビクトル・エルナンデスさんをご紹介頂きました。

そして当日、ビクトルさんとメキシコ留学経験のある東京外語大の初山黎さんのお二人が、子ども達へガイドとしてメキシコの紹介をしに来て下さり、ビクトルさんを紹介して下さった上原様もいらして下さいました。本物のメキシコ人のビクトルさんが来てくれ、子ども達は大変喜んでおりました。

まずは、フライトアテンダント役の年長児の子ども達が前に出て、「これからメキシコに出発します」という挨拶で会が始まり、メキシコ航空の飛行機が離陸する映像が流れると、子ども達はシートベルトをしめる真似をし、すっかりメキシコに皆で旅行に行くという設定に入り込んでおりました。



メキシコに着くと、まずは皆でメキシコで話されているスペイン語で「オラ！」とご挨拶をしてから、ビクトルさん達ガイドの案内で、メキシコシティのビルや地下鉄、ピラミッドなどを見て回り、皆興味津々でじっとスライドを見ておりました。

Los Voladores, Papantla という人が棒のてっぺんから回りながら降りてくるビデオには、「すごいね！」と声をあげて驚く姿がありました。

メキシコの市場、メルカドやメキシコで人気のプロレスのマスク屋さんのスライドでは、「スイカ！パイナップルも！」「どのマスクにしようかなー」と声をあげながら、子ども達は楽しそうに見ておりました。



海や洞窟の中の池など綺麗な自然や、鮮やかな鳥やワニ、イグアナ等動物も見させて頂き、子ども達は冒険気分も楽しめた様子でした。

給食もメキシコ風

メキシコの会の後は、食事までの間に近所の公園にお散歩に行ったのですが、ビクトルさん達ガイドのお二人も一緒に来て下さり、暑い中たくさん子ども達と遊んで下さいました。「ビクトルせんせい！」と子ども達に次々に呼ばれ人気者のビクトルさん。公園ではメキシコのコインも子ども達に見せて下さり、子ども

たちは手に取って触ってみたり、じーっと興味深くコインを見たりしておりました。

そして、給食もこの日は特別にメキシコ風で、タコライスとメキシカンサラダ、ひよこ豆のスープという献立でした。タコライスはタコスの具をご飯にのせたもので、タコスがメキシコからアメリカ、アメリカから日本に伝わってきたお料理と子ども達にお話しました。調理師さんがチーズを星型にしてくれたり、ビクトルさんも子ども達と一緒に食べて下さり、子ども達はとってもうれしそうにメキシコ風給食を楽しんでおりました。



楽しかった“メキシコ旅行”

ビクトルさん達が帰った後も、「メキシコたのしかった!」「ビクトルせんせいと遊べてたのしかった!」という子ども達の声がたくさん聞かれました。また、メキシコ便では、3~5歳の幼児クラスの子ども達に加えて、1~2歳クラスの小さな子ども達も様子を見に来てくれたのですが、なんとそのまま最後まで興味津々でビクトルさん達のお話を見聞きしていて、私も驚きました。今まで一番多い50名以上の子ども達が参加致しました。

今回、実際にメキシコの方や滞在していた方が来てお話を下さったり、直接子ども達と関わって下さり、子ども達にとって新しい世界に興味を抱く、かけがえのない素敵な体験になったのではと思います。そして、無事にこのような会を開催できたのは、ご協力頂いたアミーゴ会様のおかげであり、大変感謝しております。会長の上原様、ボランティアで来て下さったビクトルさんをはじめアミーゴ会の皆様、誠にありがとうございました。



<了>

【編集部注:LunchTripのHP:<http://www.lunch-trip.com/home>. LunchTrip for children メキシコ便の様子は下記 URL 参照:
<http://lunch-trip.blogspot.jp/2014/07/lunchtrip-for-children.html>。そのほかオーストラリア便:
<http://lunch-trip.blogspot.jp/2014/05/blog-post.html>
ネパール便:
<http://lunch-trip.blogspot.jp/2014/06/blog-post.html>
ブルキナファソ便:
http://lunch-trip.blogspot.jp/2014/06/blog-post_5.html】
アメリカ便:
<http://lunch-trip.blogspot.com/2014/08/lunchtrip-for-children.html>
インド便:
http://lunch-trip.blogspot.com/2014/08/lunchtrip-for-children_24.html】

お知らせ

メキシコに咲かせた日本人画家 「竹田鎮三郎在メキシコ50年記念」展



会期: 10月25日(土)~12月7日(日)

会場: 南アルプス市立春仙美術館

⇒<http://www.city.minami-alps.yamanashi.jp/kura-shi/manabu/bi-jutsukan/syunsen-museum/>

開館: 午前9時30分~午後5時

休館日: 月曜日・祝日の翌日

入館料: 一般500円/大高生300円/中小生200円

主催: 南アルプス市立春仙美術館 テレビ山梨 山梨新報社/後援: メキシコ大使館など
併催事業一覧(詳細はHP参照)

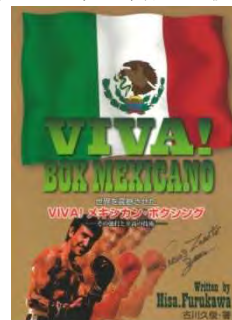
①美術対談「竹田鎮三郎とメキシコ」(日時: 10月25日 14:00/講師: 竹田鎮三郎・向山富士雄) ②「アレブリへ」に色を塗ろう(日時: 10月26日 10:00/13:30/講師: 竹田鎮三郎) ③「ピニャータ」作りに挑戦(日時: 11月1日 13:00) ④メキシコ料理を作ってみよう(日時: 11月8日 09:30) ⑤「パペルピカド」を作ろう(日時: 11月15日 13:00) ⑥メキシコ刺繍に挑戦しよう(日時: 11月22日 13:00)

メキシコで王者を育成する、元教師の日本人トレーナー~本場も認める古川久俊の手腕~

2013年4月発行『アミーゴ会だより第14号』にご寄稿いただいた在墨ボクシングマネージャー古川久俊さんの著作『Viva!メキシカン・ボクシング』が刊行されました。

本書はメキシコのボクシングを技術と文化の両面から解説しておりDVD付きで定価3000円+税。ネット書店などで購入可。

スポーツ専門誌Numberは掲題タイトルで古川さんを下記抜粋のように紹介しています。



「メキシコのボクシングは往時と比べると最近では怪物的選手も少なくなった感がある。“確かに落ちてはいるが、それはよき指導者たちがなくなったからで、優れた素材はまだまだいるよ」と語るのはメキシコ在住の日本人トレーナー、古川久俊だ。8年前まで福井県の高校教師だったが、一念発起してメキシコシティに居を構え、トレーナー見習いからスタート。指導した選手から何人もの王者が誕生し、いま現地でもその手腕が大いに評価されている52歳だ。」記事の詳細は<http://number.bunshun.jp/articles/-/821239>をクリック。

安倍総理とファーストレディー外交

アミーゴ会メキシコ代表 遠藤滋哉

「メキシコは歴史の節目において関わってきた類い稀れなパートナー」—開ロ一番
安倍総理は訪問 43 ヶ国目となるメキシコ国民に向けメッセージを発しました。

経済連携の深化に期待

総理訪問の前日 7 月 24 日には、メキシコ日本商工会議所創立五十周年を記念する「日本メキシコ・ビジネスセミナー」がイルデフォンソ・グアハルド・メキシコ経済大臣を迎えて開かれました。メヒコで 53 年の歴史を持つ日産自動車の副会長志賀俊之・経団連日墨経済委員会委員長の基調講演、平野信行・三菱東京UFJ 銀行頭取、石毛博行・JETRO 理事長の総理訪 MEX に寄せる講演の後、日墨有識者による公開パネル討論が披露されて、メキシコのコメンテーターから「メキシコと日本の間には深刻な政治問題は存在しないので、首脳会談では是非、経済協力の連携強化を進めてもらいたい」との発言があり、来場者の多くが頷いていたのが印象的でした。

“アッキー”外交の展開

このたびの安倍総理のメキシコ訪問は小泉元総理の 2004 年以來 10 年ぶりとなります。特筆されるのは独身だった小泉首相と異なり、同行された「アッキー」こと昭恵夫人のファーストレディー外交です。公式行事は勿論のこと総理の経済協議、首脳会談の合間にはアンヘリカ大統領夫人と親しく歓談、LICEO (日本メキシコ学院) の訪問、日系ご夫人方との懇談会など精力的なレディー外交をこなされました。



総理訪問の成果、検証は多くのメディアが報じていますので、ここでは総理ご一行の受け入れ事情の裏側を見ることにします。

今回最初の訪問国となったメキシコと日本との時差は -14 時間(夏時間)。政府専用機は B747-400 で任務機と副務機の 2 機が運行されました。現在日本で使用されているジャンボ旅客機はこの政府専用機の 2 機だけです。羽田空港から直行飛行ですので、ジェット気流に押されて所要時間は約 12 時間、午前 10 時少し前、総理一行はメキシコ・ベニトファレス空港第 2 ターミナル(アエロメヒコ・グループ=One World 加盟航空会社が使用)の横に位置する「大統領 HANGAR」に用意された赤絨毯の歓迎ゲートに到着されました。

車両 35 台と傘 50 本を手配

当日の朝 3 時から用意した車輛は大使館の車輛も含めて 35 台(内、荷物用の 4t トラック、プレス用 1t トラック、随員用バス 1 台)。すべて大統領 HANGAR の空港内に入れなければならないので、車種、年式、色、プレートナンバー、運転手の氏名、ID カード No.等、全てを事前に警備当局、並びに警備ゲートに書類提出して置かなければなりません。大変なのは若僧ではなく落ち着いたヴェテランの運転手を選考するコト。またメヒコの事、当日に果たしてリストにある通りのクルマ、運ちゃんが来ているかを一つひとつチェックしなければなりません。

もうひとつ苦労したのは、トラックの運ちゃんが空港へは行ったことあるが大統領 HANGAR は知らないとのことで、空港への道はカーゴ車(荷物車)の走行が許されている側道を走らなければなりません、トラックはセダンの車列に同行出来ませんので、陸橋の上を通らない側道を先導しなければなら



なかったのです。また、雨の降る時期だったので各車輛に傘を用意、50 本新調の傘を購入しました。

ところで総理の車輛と昭恵夫人の車は大統領府差回しの車輛で、総理車は Audi の黒塗り、夫人の車は白の Benz でした。日本の自動車製造関連会社が進出ラッシュのこの時期に、日本の首相専用車に日本車でも大型アメ車でもなくドイツの高級車を充てがうのは如何にもメキシコ政府の深謀なる遠慮なのか…。チョツと気になる…。深読みに過ぎるでしょうか？

車列は白バイ、先導車、安倍総理車の後は、昭恵夫人の白いベンツ、その後が黒塗りトヨタ・カムのり世耕弘成・内閣官房副長官、やはり黒塗りカムのりの西村康稔・内閣府副大臣、大型ヴァンで目賀田大使ご夫妻、財界随員、警備担当等々です。あと、気になったのですが、もし見間違っていないければ開襟シャツであの入道姿は「飯島勲」さんではないかと思うのですが…。拉致問題の裏工作など、北朝鮮フィクサーが総理の中南米訪問に随行されたりするのかなァ…。！？。

メヒコの 2 人のサムライ

今回の安倍総理訪 MEX につき、メキシコの経済紙 **EL ECONOMISTA** はこんな記事を配信しました。

「(前略) 400 年前にこの地に降り立った支倉常長に倣い、安倍氏は常長と同じミッション(使命)を帯びて 400 年後にこの地 México に来たのであろう。サムライ・ハセクラ一行の様子を当時、先住民の貴族「チマルパイン」がナワトゥル語(アステカの言語)で書いた日記に残している。それをミゲル・レオン・ポルティージャがスペイン語に翻訳した文章の一節にいわく『彼等サムライが足下に付けていたサンダルのような履物？は“Waradyi”と呼ばれ、後にメヒコの“Huarache = フラチェ = 皮製のサンダル”の元となったのではないか！？(後略)』(中略)安倍総理が祖父の岸信介・元総理以來 55 年ぶりにメキシコを訪問されたことは誠に意義があり、感慨深いものである。

2005 年に発効された E P A (日墨経済連携協定)は新しい両国の絆をさらに緊密にした。我々は安倍晋三総理の来訪を心から歓迎する。」(概訳 ENDO)

総理の多忙な一日を官邸発表文は次のように伝えていきます。「7 月 25 日(現地時間)、安倍総理はメキシコ合衆国の首都メキシコ・シティを訪問しました。総理は

始めに、英雄少年の碑への献花式に臨み、その後、国立宮殿における歓迎式典に出席しました。続いて、エンリケ・ペニャ・ニエト大統領と会談を行った後、覚書等文書発表式に立ち会い、共同記者発表を行いました。その後、ペニャ・ニエト大統領夫妻主催午餐会に出席しました。夜には、「日本メキシコ経済協議会」に出席しました。」



他方、メキシコ市発の共同電は総理のテオティワカン視察を次のように伝えています。「メキシコ訪問中の安倍晋三首相は 26 日昼（日本時間 27 日未明）、ペニャニエト大統領の案内で、メキシコ市郊外の世界遺産テオティワカン遺跡を視察した。同遺跡の中で最大の遺構である“太陽のピラミッド”の頂上で願い事をするとかなうとの言い伝えがある。首相は記者団から何を願ったか聞かれ、「デフレ脱却、地方再生を願った」と語った。濃紺のスーツにノーネクタイ姿の首相は昭恵夫人と共に、発掘調査を続けている杉山三郎愛知県立大特任教授の説明を聞きながら、時折うなずいていた。」

総理は太陽のピラミッドに登頂した 26 日の夕刻に、日墨協会会館にて日系人約 350 人との懇談会に出席されました。お見受けしたところ、体内に残っていた酸素も二日目で薄れ、高地で空気が薄いメヒコでピラミッドに登られて、さすがにお疲れのご様子でした。

日の丸機の再就航期待

ここであまり知られていない、今回間近で見た政府専用機のお話しです。先にも触れましたが、今日本には旅客機としてのボーイング 747 は政府専用機の 2 機しか残っていません。機体には漢字で「日本国」と標示されていて尾翼に日の丸です。機体番号は 20-1101(任務機)、20-1102(副務機)です。座席数は 150 席、機内食は（幕の内ふうの）お弁当、ワインは国産品しか無いようです(乗った人の話)。機内には貴賓室、執務室、随員席、一般席(プレス用など)の他、喫煙ルームもあるそうです。

この政府専用機を管理、運行するのは航空自衛隊の航空支援集団・特別航空輸送隊です。この隊は北海道の千歳に常駐する第 701 飛行隊(特別航空輸送隊)で、機内アテンダントも自衛隊特別空中輸送員で自衛官で



す。ワインサービスなど機内サービスも日本



航空で 3 ヶ月の研修訓練を受けます。

日常整備はこの隊が受け持ちますが、機体やエンジン部などの整備は日本航空など民間に受け持ってもらいます。航空会社がエアバス A350 や B777、B787 など次々新しい機種に変更している中、政府専用機は政府が決めた 2018 年退役まで日本航空の専門スタッフが整備をする契約になっています。その流れで行くと、日本航空が 2019 年から B777 の後継機として決

定している A350 が次期政府専用機として有力なのですが、政府専用機には必須の条件が 3 つあります。①アメリカ東海岸(ワシントン)へ直行可能な航続距離を有すること。②貴賓室や執務室、高性能通信機器と随員などのスペースを十分確保できること。③将来に亘り国内航空会社で整備が可能であること。

これら 3 条件を満たす機材となると、今のところ B777-300ER と A350 しか無く、政府専用機の後継機は自ずとこの 2 機種に絞られます。しかし、総理大臣が必ず訪問するであろう米国ワシントンへ欧州製のエアバスで行くことは考えられません。いまだ記憶に新しい本年 4 月に国賓として訪日したオバマ大統領へのお土産としての効用も考えれば、米ボーイング社の B777-300ER に軍配が上がります。実際そのとおり政府は 8 月 12 日に正式決定をしました。

後継機決定に先立つ総理のメキシコ訪問に同行した日本航空の植木義晴・社長と全日空ホールディングスの伊東信一郎・社長とが道行き道中どのような話し合いが行われたか知る由もありませんが、ANA の伊東社長が「今回ここ(Mexico)に来て、あらためて日本企業の進出スピードはかなりの勢いだと実感した。直行便の就航(自社便)を積極的に検討したい」と述べ、2016 年に向けてメキシコへ自社便を就航させる、と画期的かつ具体的な表明がなされました。そのせいでしょうか、次期政府専用機に決まった B777-300ER の整備は全日空が請け負うことになりました。2010 年にメキシコ便を撤退した日本航空は難しくなりましたが、いずれにしても近い将来メキシコに日の丸の翼が蘇るのは嬉しいことです。今日の労めが明日の稔りに、メキシコと日本の広く明るい夢を託す未来にしたいものです。



先人の努力を礎に

メキシコに日本のファーストレディーの友愛をお披露目下さった“アッキー”夫人の言葉を借りて、この稿を閉じることにします。

「メキシコの各地で活躍される方々のお陰で、日本人は評価され、歓迎して頂くことができます。皆さんにとっても暖かくお迎え頂き、最後にお別れする際、涙がこぼれました。

お渡し下さったお手紙の一部をご紹介します。

『・・・私は戦後日本企業のメキシコ合衆国への再進出に際し少し努力した者でございますが、外地在住の日本人として、国際的に責任を充分果たしているとは言えない日本国の国民として、肩身の狭い思いをして参りました。私は常々、総理閣下のお考えは我が日本国を“普通の国”にされることと拝察し、長生きはするものだと喜んでおります。日墨の長い交流の中でも 1888 年の日墨友好通商条約の締結は列強との不平等条約を平等条約に変える嚆矢となり、明治政府の惨憺たる苦勞、努力があつたにせよ、メキシコ国の決断を我々日本人は決して忘れてはならぬことと強く思っています・・・』

かつて海外に移住し、苦勞をされた方々の存在を私達は忘れてはならない・・・。

皆様、ありがとうございました。 安倍昭恵」(了)

レフォルマに遊ぶ歴史⑤

～銅像でたどるメキシコ偉人案内～

【編集部注：メキシコで活躍している若いお二人の力作その⑤をお届けします。通常の旅行ガイドにも載っていない内容で本邦初演とも言えるものです。これであなただも“レフォルマ通”です。筆者は山内さん(チケット課)と酒井さん(ペリカントラベルネットワーク課)です。お楽しみください。】

メキシコ観光(メキシコ) 山内勇志/酒井梢恵



Don Jose Eduardo de Cardenas (地図中 26)

1765年10月13日、現在のタバスコ州(当時タバスコはユカタン州の一都市であった)に生まれた聖職者であり政治家である。豊かな家庭の生まれではなかったが、スペイン王国軍の大佐であった義理の叔父の支援により、神学を学ぶ上での必須科目であるラテン語文法を学ぶ機会を得た。

その後、ユカタン司教からの奨学金を得て、現在もバジャドリに旧学舎が残る Tridentino 神学校で聖職者としての予備教育を受けた。16歳の頃には、教区の司教から下級聖品という聖職位を異例の早さで受け、24歳でメキシコシティに移り住んだ際には、現在の歴史地区に位置した San Juan de Letran 神学校の副学長、加えて上級聖品の位を授かり聖職者としてのキャリアを築いていった。

そして30歳のとき司祭に叙階され、大司教区内に

おける、あらゆる聖職活動に従事する許可を得るのであった。

そんな折、ユカタン司教から政治的に重要な役職を与えられ、帰郷することとなった。

宗教と政治が一体となっていた当時の社会において、彼はその働きを全うし、1810年45歳のときにカディス憲法制定議会に出席する役目を担い、タバスコの地の下院議員に選出された。

～カディス憲法制定議会～

ナポレオンのスペイン侵略と独立戦争の間、1810年から仏の占領を逃れたスペイン南部の港町カディスにて開催された国民議会である。ここで話し合われたのは、自由主義的な民主憲法の制定であり、1812年にはスペイン初の成文憲法である「カディス憲法」である。この会議が中南米に対して持った大きな意味は「初めてスペイン本国の国民議会にアメリカ植民地の議員が召集されたこと」と「1821年から始まったアメリカ植民地の独立後、各国の憲法制定にあたり母体として採用されたこと」の二つである。



(カディス憲法制定議会の様子)

翌年 1811 年 7 月 24 日、彼はカディスの議会にてユカタン州による搾取に苦しむタバスコの状況と、その解決策をまとめた報告書を提出した。内容は以下の通りである。

- (1) 民選市議会の設置
- (2) 三権分立(立法権・行政権・司法権)
- (3) 商業の自由化
- (4) 農業組合の設置
- (5) 教育の無償化
- (6) 社会的身分の撤廃
- (7) インディオへの差別・排斥の禁止
- (8) タバスコの独立

また同年 8 月 1 日には彼を含む 27 人のアメリカ植民地代表のグループが、この前年にメキシコで始まった独立戦争(1810~1821)の動機を論じ、本国と植民地との和解の道を説いた。(しかしこの主張が、1814 年に仏からの独立を達成し、王位に返り咲いた Fernando7 世の反感を買う 1 つの要因となった。このことが後にカディス憲法は無効化や反動による絶対王政強化の流れに繋がっていく。)

その後 1822 年 12 月 6 日、この議会によってカディス 1812 年憲法が採択された。



その後、彼は故郷に帰ることになるが、その頃には革命分子であるとの疑いをかけられ、王国軍の監視の下に帰国となった。晩年は故郷の教区で聖職者としての生涯を全うしつつ、タバスコのユカタン州からの独立に尽力した。

そして 1821 年、56 歳という若さで他界した。

彼自身は惜しくもタバスコの独立をその目で見ることはできなかった。

しかし自由主義やその思想に基づく先住民の保護などの彼が掲げた現代的な思想は、人々の共感を呼ぶこととなり、彼の同士たちにより 1824 年にタバスコ州がユカタン州から独立し、正式な州に認定されたのであった。

こういった自由主義的な思想や運動の広がりとは、この頃から中南米各地で起こり、19 世紀前半には多

くの国が本国からの独立を達成することとなった。彼が植民地側の代表としてカディス議会で議題に挙げた一都市としての権利の主張は、1810 年に Miguel Hidalgo がドローレス・イダルゴの「ドローレスの叫び」に始まり、1821 年まで続くメキシコ独立戦争をも大きく後押ししたに違いない。

先のカディス会議の解説にもあるように独立した国々は、自由主義に基づくカディス憲法を自国の新憲法の土台に採用した。

この憲法の採択と 17 世紀には自由主義の思想が現れ、その哲学が社会に浸透し始めていた欧米諸国が、同時期に王政復古によって絶対主義が再燃していたスペイン本国による独立後の中南米諸国への干渉を牽制することになったと考えられる。そのおかげで現在の中南米諸国のそれぞれに個性をもった姿があるとも言えるのではないだろうか。(了)

トピックス

メキシコ観光局、「JATA ツーリズム大賞 2014 観光局・大使館部門賞」を受賞!

～日本人渡航者が年間 10 万人を突破～

メキシコ観光局は、9 月 25~28 日に東京ビッグサイトで開催された旅の祭典「ツーリズム EXPO ジャパン」で、「JATA ツーリズム大賞 2014 観光局・大使館部門賞」を受賞しました。同賞は旅行需要の喚起に貢献した企業や団体に贈られ、今回の授与は 2013 年 12 月にメキシコへの日本人渡航者数が通年で 10 万人を突破という快挙の達成を評価されたもの。

メキシコ観光局駐日代表ギジェルモ・エギアルテさんは、「メキシコへの渡航者数はアジアでは日本人が最大です。従来の定番である遺跡めぐりやカンクンに加えて、新たにワイナリーツアーやダイビング、世界遺産の街プエブラ、グアナファト、ケレタロなどの人気も高まっています。(中略)メキシコを実際に訪れた人からの評価が高く、リピーターが多いのが特徴です。メキシコ観光局では、今後も日本の方々にメキシコ旅行を楽しんでいただくための活動を続けてまいります」と受賞に際して述べています。【注：観光局発表文の URL:<http://jibpress.ismedia.jp/ud/pressrelease/5424f666b31ac972c600000b>】

あとがき：今年の夏は豪雨災害が続いたかと思えば、晩夏に至っての御嶽山噴火、名残の大型台風来襲と何やら不穏な自然現象が続いています。秋の紅葉を静穏に賞でる時の一日も早い到来を待ちたいものです。今号もご投稿者各位のお陰で、充実した記事満載の読み応えのある会報となりました。ご協力に改めてお礼を申し上げます。今年の Fiesta Mexicana 2014@お台場は好天に恵まれて盛大でした。アミーゴ会西日本は Fiesta Mexicana@大阪に併せて懇親会を盛大に開催しました。御宿での日墨学生交流事業も大きな成果を残しました。これらに加えてメキシコの政治潮流についても次号(新年号!!)にご寄稿いただく予定です。会員の皆様のご投稿を歓迎します。【141006 か】